

博士学位論文審査要旨

2023年1月24日

論文題目： カタツムリがうたうとき
——沖縄・やんばるの軍事化にあらがう人びと——

学位申請者： 山本 真知子

審査委員：

主査： グローバル・スタディーズ研究科 教授 富山 一郎
副査： グローバル・スタディーズ研究科 教授 村田 雄二郎
副査： グローバル・スタディーズ研究科 教授 太田 修

要 旨：

山本真知子氏提出の学位申請論文は、沖縄東村高江における米軍ヘリパッド建設をめぐる反対運動に自らも参加し、また当該地に移り住み住民として暮らしながら続けられた密度の高い聞き書き作業から、同運動がもつ意義を検討する社会運動研究である。その際、研究方法として検討されているのは、ベトナム反戦運動を担いながら東南アジアにおける研究活動をつづけた鶴見良行、1950年代から60年代にかけて筑豊においてサークル運動にかかわりながら女性の元炭鉱労働者たちの聞き書きを続けていた森崎和江、戦後農村における女性運動をになった山代巴である。同論文では、これまでの社会運動研究を批判的に検討しながら、学知のフレームを運動にあてはめるのではなく、運動とかかわりながら運動を記述していったこうした人々の著作の検討から、自らの研究方法を導き出している。かかる点に山本氏の研究の大きな特徴があるといえるだろう。

こうした同論文の研究方法の特徴にかかわって、重要な要点になるのは「聞き書き」という問題領域である。同論文における聞き書きという方法は、社会学的な社会調査やオーラル・ヒストリーといった研究分野における方法論というより、上記の鶴見、森崎、山代の活動を検討することにより導かれている。すなわち聞き書きとは、アカデミアの研究方法である以前に、たとえば森崎和江が1950年代に北九州の筑豊でのサークル運動の活動として始めたものであり、また同様の活動は敗戦直後に山代巴が農村における女性運動の中で試みた民話という方法にも看取することができる。そこでは聞き書きは、運動の学的調査ということではなく、聞き書き自身が運動であり、人々の声を書くことが、新たな関係を生み出し、人を組織し、場を作ることにつながっているのである。また鶴見良行は、こうした聞き書きを自らのフィールドワークの中に確保しようとした。運動の現場に住み込み自らも日常的に運動に参加している山本氏が研究方法として検討したのは、こうした聞き書きの系譜である。ちなみに論文題目にある「カタツムリ」は、山代巴の著作『民話を生む人々』から引かれているのであり、そこで含意されているのは、暴力にさらされながら生き延びようとしている人々が語り始めるプロセスである。同じく題目にある「うたう」とは、言葉以前の言葉の領域を示している。また同論文でめざされているのは、社会運動を出逢いの場としてとらえ、出逢うという出来事を通して一人ひとりが抱えもつ経験が関係性へと転化していくところに、新たな運動の可能性を見出すことである。いわば問題解決の是非で運動をとらえるのではなく、新しい関係生成的な場として運動をとらえるのであり、またそこでは聞き書きを行う記述者自身もこうした生成する関係性をになう存在として設定されている。そしてこのような意味での出逢うということは、森崎和江のサークル運動における議論から導かれている。

「はじめに」と「おわりに」を含め、論文は全8章からなり、密度の高い聞き取りを軸に全体が構成されている。「はじめに」では、論文題目の説明とこれまでの社会運動研究の批判的検討が

おこなわれ、また対象となる東村高江の米軍ヘリパッド問題についての説明がなされている。第一章では、社会運動と学知の関係を鶴見良行のフィールドワークを丁寧にとどることにより検討している。そこではとりわけ鶴見の『ナマコの眼』に象徴されるように、人間以外の生物から歴史や社会を考察する鶴見の方法がとりあげられ、この方法の意義を、いまま米軍ヘリパッドの建設地域である沖縄北部の山林地帯で活動する蝶類学者への聞き書きとともに考察している。

第二章は、高江での活動としてあるテントでの座り込みに参加している元ハンセン病患者の家族の人からの聞き書きにより構成されている。ここでは、反基地運動とハンセン病をめぐる差別とのかかわりが、注意深く議論されている。第三章は、座り込みにかかわってきた人からの沖縄戦の聞き書きにより構成されている。ここでは、沖縄戦の記憶がヘリパッド建設への反対と深く結びついていることが示されている。こうした第二章と第三章に通底しているのは、高江の運動が沖縄における近現代の歴史的系譜と深くかかわっていることであり、こうした系譜から切り離して運動を解釈し説明することへの批判が示されている。

第四章は、高江の座り込みにおいて出逢った、森崎和江とかかわりのある人からの聞き書きにより構成されている。この人物は、1970年代初頭に北九州において森崎とともに活動した経験を持つ。ここでは、聞き書きをする山本氏が、この人物への聞き書きを通じて森崎を何度も再解釈し、その中で山本氏自身が変わっていったことが明示され、こうした聞き書きのプロセスを森崎のいう「出逢いの思想」として検討している。第五章は、第四章で検討された出逢いの場として、座り込みのテントが検討されている。テントという場は学習や交流の場でもあると同時に、一人ひとりの経験がよりあう場でもあるということが、具体的な事例とともに描き出されている。またグアムにおける実弾射撃訓練場建設に反対してきた人とのテントでの出逢いを注意深く検討することにより、連帯という言葉においては語ることのできない経験と経験の繋がりを議論している。

第六章は、京都から高江に移り住んだ人を軸に、その家族もふくめた聞き書きにより構成されている。ここでは毎日の生活と運動が密接に重なりながらも、軍事的暴力にさらされながら生活することの痛みが表明できない状況が検討されている。またこうした日常の中で生活をする山本氏自身についても言及がなされており、こうした日常において山代巴を読むことの意味が考察されている。「おわりに」では、山本氏が自身の経験を想起しながら、再度「はじめに」において表明された「カタツムリがうたう」ということを、高江の座り込みにそくして検討し、継続すべき運動の未来像を今後の展望として示している。

同論文は、聞き書きという方法を、これまでの運動の系譜において再検討し、その上で運動を研究することの意味を具体的に問うものである。こうした試みは、近年、文学研究においてすすめられている記録文学における記録と運動の関係にかかわる研究、またサークル運動研究でなされている集団形成における聞き書きの可能性にかかわる議論とも重なるものであり、新しい社会運動研究の地平を切り開くものであると高く評価できる。審査では、研究方法にかかわる疑問や章別構成の適切さについて議論がなされたが、どの点も同論文の高いオリジナリティを損なうものではなく、論文審査委員会は、山本真知子氏提出の学位申請論文を、博士（現代アジア研究）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると判断した。

総合試験結果の要旨

2023年1月24日

論文題目： カタツムリがうたうとき
——沖縄・やんばるの軍事化にあらがう人びと——

学位申請者： 山本 真知子

審査委員：

主 査： グローバル・スタディーズ研究科 教授 富山 一郎
副 査： グローバル・スタディーズ研究科 教授 村田 雄二郎
副 査： グローバル・スタディーズ研究科 教授 太田 修

要 旨：

山本真知子氏提出の学位申請論文にかかわる総合試験を、2023年1月10日の13時から14時半まで行った。山本氏の研究分野の一つである沖縄戦後史研究の知識、ならびに論文で言及されている鶴見良行、森崎和江、山代巴にかかわる諸研究の専門知識について、審査委員が試験をし、十分な知識があることが確認された。また必要とされる語学（英語）の能力についても、十分な能力があることが確認された。よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博士學位論文要旨

Abstract of Doctoral Dissertation

論文題目： カタツムリがうたうとき
Title of Doctoral Dissertation ——沖縄・やんばるの軍事化にあらがう人びと——

氏名： 山本 真知子
Name

要旨：
Abstract

本論は、戦後沖縄運動史のなかで運動拠点の一つとして数え入れられてきた、「やんばる」と呼ばれる沖縄島北部・東村高江の米軍ヘリパッド移設問題をとりまく運動を、出逢いによって創造的に生み出されてきた場として検討する。表題に掲げた「カタツムリ」は、作家・山代巴が敗戦後に見出した言論空間のありようから着想を得たものであり、暴力へのさらされをいち早く察知し反応する機動性と内閉性を備えることで生き延びてきた人びとの経験を聞き一書く過程を通して、具体的に立ち上がらせていくことになる。人びとの孤立に歯止めがかからないなかで、傷を媒介とした出逢いを磁場にもつ運動実践に光を当てるとともに、これを遂行していくことが、本論の目的である。

東村高江を取り囲むように米軍北部訓練場のヘリパッドを移設する計画は、1995年に起きた米兵による少女暴行事件以降、沖縄の基地負担軽減を目的として進められてきた。工事開始に伴い2007年7月、座り込みによる説明要求・抗議行動がはじまり、米軍北部訓練場ゲート前に設置された「座り込みテント」を活動拠点として、国内外の運動体や個人との間に連帯関係を築いてきた。この高江の座り込みは、これまで伊江島土地闘争や金武湾闘争、辺野古新基地建設に対する抗議行動といった、戦後沖縄で展開されてきた運動の延長線上に位置づけられ、軍事的暴力とそれへの抵抗の現場として論じられてきた。また、グローバルなネットワークを構築しながら、多様性豊かな直接行動を展開してきた点も評価されている。しかしながら、同問題にかかわってきた人たちの経験は、運動を考察する目的で副次的に用いられるに留まってきた。それは、他者との出逢いを通して形成・維持されてきた運動実践を引き出しえない状況に結び付いており、翻って言えば、経験されてきた痕跡を聞きとる行為が、運動を研究するなかで確立されてこなかったことを意味する。

そこで本論では、人びとの経験を聞き一書く過程を通して、運動を縁取りなおしていく。その特色は三つある。一つめは、個人の経験に即して運動を検討することである。運動の主体を集団から個人に置き換えるのではなく、一人ひとりの経験を聞き一書くという過程を通して、既存の運動史を解体し、出逢いの場としての運動を打ち立てていくことを意味する。

二つめは、聞きとり調査の運動論的意味を検討することである。聞きとり調査を客観的分析に留めるのではなく、聞き一書くという行為自体をアクティヴィズムの領域に引き込んでいく。具体的には、研究者自身が身を置いている場を考察の対象とし、研究者の発話や立ち位置、倫理的配慮のあり方も含めて批判的に検討する。そのため、社会運動研究において自明化してきた「運動を研究する」という行為の正当性を問いなおし、「研究を運動する」という方向性を模索することになる。

三つめは、出逢いをめぐる社会運動思想の理論化である。本論では、高江のヘリパッド移設問題にかかわる運動を考察していくなかで、経験を聞き一書く行為の前提として他者に出逢おうとする態度を確保してきた、鶴見良行・森崎和江・山代巴の視座と方法と呼び込み、思想的支柱に据える。そして、聞きとりを分析や解説に結びつけるのではなく、自分自身も出逢いを通して変

わっていく場として捉えなおし、独自の運動論を発展させていくことにつなげる。

本論は、第1部「運動研究という問い」と第2部「生きるための運動」の2部構成になっている。第1部では、フィールドワークという移動しながら考える営みと、経験を聞き一書くという行為を通して、どのように他者との関係性が変わっていくか考察する。

第1章では、鶴見良行がきりひらいてきたフィールドワークの実践と理論をたどっていくことを通して、知と運動の関係を問いなおす。鶴見は東南アジアを歩くことを通して、資本主義によって分断されたひとやものを知っていくプロセスを、関係性や暮らしのあり方を根底から変えていく、独自の運動として確立しようとしていた。本章では、『ナマコの眼』（1990）に出てくる、生きものの視点から世界を見るという実践に接近する方法として、米軍基地の存在と軍隊の訓練によるやんばるの森の生きものたちの影響を調査しつづけてきた、あるチョウ類研究者の経験をとりあげた。そして、チョウのことを知ることが現状を変えることにつながっていくところに、知の再編過程に運動を組み込もうとした鶴見と共通するものを見出した。

第2章では、運動の主体は集団という前提に問いを立て、個人の経験を通して運動を語りなおす。まず前半で、還暦以上の運動参加者六人に対する聞きとりから、いかに暴力を予感し、運動の場に集いあらわれてきたか、その半生をたどっていくことを通して、「運動の高齢化」言説に対抗する視座を示す。本章で重要なのは、すでに聞いた話を聞きそこなっていたかもしれないと事後的に気づき出逢いなおしていくなかで、ゾンビ化したカタツムリ的存在が蘇生するかもしれない可能性にある。後半では、元ハンセン病患者の親をもつ息子のナラティブをとりあげ、父との関係性において、かれが経験してきた聞きそこないの痕跡と、その聞きとりを通して筆者自身が経験した聞きそこないを考察した。

第3章では、沖縄戦体験者の記憶をいかに継承していくかという問いを、座り込みの場と体験者の家族の視点と実践を通して掘り下げる。座り込みの場では、沖縄戦体験者の証言を反戦平和の思想の拠り所としてきた一方、語り以外の部分にあらわれる記憶の断片をあらかじめ排除してきた。本章では、ヘリパッド建設に反対してきた高江在住のある沖縄戦体験者がのこしてきた奇妙な言動をとりあげ、家族の視点から読み解いた。それから川村邦光の弔い論を踏襲し、沖縄戦を生き延びたかれの死後、かれ自身と家族、そして筆者が、それぞれどのように亡霊を歓待してきたのか跡づけ、弔うという行為を記憶実践に接続して検討した。

第2部では、森崎和江の聞き書きと山代巴の運動実践を下敷きとして、暮らしのなかから運動を考える。

第4章では、高江とグアム間ではじまっている連帯への連なり方を考える方法として、森崎の聞き書きと沖縄を考える視座と実践、そしてかの女がつくってきたおしゃべりの場を検討する。森崎は、植民者二世の自分にとってのふるさとを求めて、元炭坑労働者たちの聞き書きをはじめ、労働を基盤とした関係性を考えつづけてきた。本章では、沖縄の施政権返還を目前に控えた1960年代後半～70年代の初めに、森崎が若い下層労働者たちとともに立ち上げた、「おきなわを考える会」で、自分たちの暮らす筑豊・北九州の問題を考えるなかで、沖縄を考えるという営みを生み出そうとしてきた過程をたどった。

また、本章後半では当時、森崎の自宅に出入りしはじめたある沖縄出身の大学生の視点から、森崎のもとでおしゃべりすることが、生きていくうえでどんな意味をもつ経験になってきたか考えた。かれは「オキナワマンガタミー」という、植民地的状況下がつづくなかで沖縄の先人が内面化してきたものも含めて、沖縄にかかわるあらゆるものをその身に背負い込んできた。だが、この森崎との対話の場に身を置くようになってから、孤独に抱え込みつづけてきた苦悩を少しずつ言語化していく。本章では、それに連なる実践が、名護市辺野古と高江の運動の場で試みられてきたことを考察し、おしゃべりの場がもつ可能性を示唆した。

第5章では、座り込みテントという場が、軍事的暴力を察知した者たちが集い、出逢う場として確保されてきたことの意味を考える。高江の座り込みは、自分たちの声が聞きとられず、国か

ら納得のいく説明を受けることもできないなかではじまった、ことばを待つと同時に、かき消させないための場所として形成・維持されてきたものであった。しかしながら、そのテントさえも奪おうとする動きが後を絶たない。本章では、2019年に二度米軍によってテントが強制的に排除されたことのうちに問答無用の暴力を捉え、それへの抵抗としてくりかえしテントが張りなおされてきたことと、政府交渉という場が設定されてきたことをとりあげ、そのなかでの具体的実践と意義を検討した。また、高江に住みながら座り込みをしてきた住民への聞きとりを通して、テントでの出逢いからいかに希望が見いだされてきたのか探った。

第6章では、地域のなかで暮らしながら運動することの困難さに着目し、暮らしと運動の関係を再考する。前半で山代巴が敗戦後、民話を媒介して、地域や家庭で沈黙をまもってきた人たちのあいだに本音の言える関係を築いてきた過程をたどる。後半では、軍事的暴力にあらがう三人の人たちへの聞きとりを通して、暮らしのなかにきりひらかれうる運動を提示する。と同時に、自らの生きる場において読むという行為がどんな拮据をもっているのか示唆した。

本論では、沖縄・やんばるの軍事化にあらがう人びとが、軍事的暴力を感知し、ともに生き延びようとしてきたプロセスに着目し、カタツムリ状況性に即してこれを描きだしてきた。カタツムリがうたうとき、そこには痛みが抱え込まれている。だが、そこから生まれるリズムや旋律、響きは、容易に言語化できない経験のなかにことばを生みだそうとするなかであられる痛みを内包し、それが受けとめられはじめる契機になりえる。本論は、既存の言論空間から締め出されていくなかで、沈黙の領域に抱え込まれてきたたがいの痛みを媒介して出逢い、つながっていく関係性が、現状を内側から変えていく可能性を見出し、これに光を当てたものである。